

第151回山口西田読書会

第150回（2017年9月2日）のprotocols（参加者は9人）

【テキスト】西田幾多郎『自覚に於ける直観と反省』（1917〈大正6〉）

西田幾多郎『信濃哲学会のための講演』（大正13）

フィヒテ『全知識学の基礎』（1794-95）

### 1) protocolsの確認

8月中が休会であったことから約1カ月ぶりの報告であった。まず、デデキント無限の理解を再確認した（確認できたかどうかは別）。その後、哲学的問いに代えて「直観」「反省」「自覚」の関係を整理した。そもそも言葉にならない経験を認めるかどうかの問題になり、認める人の数は出席者のほぼ半数であった。関係の整理をかねてテキストに入った。

### 2) テキスト

まず『自覚に於ける直観と反省』（1917）の「一」（配付資料の15ページ）の記述より「直観」「反省」「自覚」を――

直観 知るものと知られるものと一つである、現実そのままの不断進行の意識

反省 進行の外に立って、翻ってこれを見た意識

とした上で両者の結合と直観に対する反省の意味が問題になっていることを確認した。※その場合、問題とするのは「如何にしても直観の現実を離れることができないと考えられる我々」とされている点である（直観が基本）。

さらに「直観」「反省」の内面的関係を明らかにするものが「自覚」であり、「自覚」は自己の作用を反省し、反省することがまた作用となり無限に進む。この考え方はフィヒテにも見ることができ、章の後段においてフィヒテの「直観」が紹介されている（「以上論じた様に考へて見ると」以降）。

ここでフィヒテ『全知識学の基礎』（1794-95）の第一章を参照した。そこでは「自我は自己自身を定立する。そして自我はこの自己自身による単なる定立によってある」、「自我は「働くもの（das Handelnde）」であると同時に、活動の『産物』（Produkt）である」とあり、「事行（Tathandlung）」の語が登場する。

そのようなフィヒテを西田はどのように理解していたかを、この日あらたに配付された『信濃哲学会のための講演』（複数ある中のフィヒテの回）で確認した。

### 3) 哲学的問い

無限は繰り返しにとどまり、発展の推進力は反省にあるという理解でよいか

（『自覚に於ける直観と反省』の一の記述を読んで）

自己の中に自己を写す作用は、反省によって「自己に或物を加える」（資料16ページ、11行目）とある。英国にいて英国の地図を描くことも、向かい合わせの鏡に映した像も、無限の「繰り返し」であり、進んではいても何か付け加わることはない。無限が進む原理（繰り返しの原理）と反省が進む原理（発展の原理）は別ではないのか。別だとすれば反省が進む原理をあきらかにしなければ論が完結しないと考えるがどうか。

（報告、岡部）